



日本史 B 問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は、14 ページある。
2. これは、日本史 B の問題である。解答用紙が出願の時に選択した科目のものであるかどうかを確認のうえ、解答すること。
3. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
4. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
5. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
6. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれも HB・黒)で記入しなさい。
7. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
10. 解答用紙は持ちかえらないこと。
11. この問題用紙は必ず持ちかえること。
12. 試験時間は 60 分である。
13. マークの記入例

良い例	悪い例
	

〔 I 〕 以下の文章は歴史書『愚管抄』について記したものである。文章内における a ~ e の【 】に入る最も適切な語句を①~⑤の中から選び、マークしなさい。また、 ~ の中に入る最も適切な語句を漢字で記しなさい。

鎌倉時代の僧侶、慈円(慈鎮)は、関白 (1149~1207)の弟であり、比叡山延暦寺の最高位 にまでのぼった人物である。その著書『愚管抄』は、歴史を貫く「道理」と末法思想を柱にして、神武天皇から承久の乱直前までのわが国の歴史を叙述した書物であり、とくに901年成立の a 【①『日本三代実録』 ②『続日本後紀』 ③『日本文徳天皇実録』 ④『類聚国史』 ⑤『日本後紀』】を最後にして勅撰正史がつくられなくなった平安中期以降の歴史を知るうえでは、重要史料とされている。

類似の書物としては、南北朝時代の北畠親房によって書かれた歴史書『神皇正統記』が有名である。北畠親房は b 【①『応安新式』 ②『樵談治要』 ③『建武年間記』 ④『職原抄』 ⑤『公事根源』】の著者としても知られているが、南朝の公家であったため『神皇正統記』は政治的には南朝の立場を正統とする思想が貫かれている。これに対し『愚管抄』には、慈円が の弟であることからわかるように、過去の摂関政治を肯定する叙述がしばしばうかがえる。

摂関政治とは、早くは藤原忠平が c 【① 清和 ② 光孝 ③ 醍醐 ④ 朱雀 ⑤ 冷泉】天皇(923~952)の幼少時に摂政、成人すると関白についたように、藤原氏の氏長者が独占的に摂政・関白の任につき、天皇権を代行する政治形態のことである。とくに969年の安和の変で左大臣 (914~982)を失脚させたのを最後にして、藤原北家が天皇の外戚の地位を独占し、摂政・関白がほぼ常置される体制が整った。

たとえば、以下の引用文は後三条天皇の荘園整理政策について叙述した『愚管抄』の有名な一節である。

延久ノ記録所トテハジメテヨカレタリケルハ、諸国七道ノ所領ノ宣旨・官符モナクテ、公田ヨカスル事、一天四海ノ巨害ナリトキコシメシツメテアリケルハ、スナハチ宇治殿(藤原頼通)ノ時、一ノ所ノ御領々々トノミ云テ、庄園諸国ニミチテ d 【① 受領 ② 記録所 ③ 宇治殿 ④ 郡司 ⑤ 院庁】ノ

ツトメタヘガタシナド云ヲ、キコシメシモチタリケルニコソ。

ところが、このとき藤原頼通は「ナンデウ文書カハ候ベキ」（なんで文書など持っていようか）と述べて、記録所への公驗（権利を証明する文書）の提出を拒んでいる。そのため、最後は後三条天皇が折れ、「前太相国（頼通）ノ領ヲバノゾク」（頼通の荘園は除外する）ということを決定したという。ここの部分の叙述では、摂関家の荘園が他とは異なる由緒をもつものであり、後三条天皇もそれを容認していることが強調されている。

また『愚管抄』は武士の世の到来を「保元元年七月二日、4 院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヨコリテ後、ムサ（武者）ノ世ニナリニケルナリ」と表現したことで有名であるが、一概に武家政治を否定していたわけではなかった。とくに1219年、將軍源実朝が暗殺された後、わずか二歳で將軍後継者として鎌倉幕府に推戴された三寅については、以下のように語っている。

二歳ナル若公、祖父（西園寺）公経ノ大納言ガモトニヤシナヒケルハ、正月寅月ノ寅ノ歳・寅時ムマレテ、誠ニモツネノヲサナキ人ニモ似ヌ子ノ、占ニモ宿曜ニモメデタク叶ヒタリトテ、ソレヲ、終ニ六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時ヨリクダリツクマデ、イササカモイササカモナクコエナクテヤマレニケリトテ、不可思議ノコトカナト云ケリ。

ここで慈円が、その器量を褒めたたえている「寅月ノ寅ノ歳・寅時」に生まれた三寅こそは、のちに初代の摂家將軍となる5（1218～1256）である。慈円は「將軍ニハ摂籙ノ臣ノ家ノ君公ヲナサレヌル事ノ、イカニモイカニモ宗廟神ノ、猶君臣合體シテ昔ニカハリテ、世ヲシバシヲサメントヲボシメシタル」（將軍に摂関家の若君を立てるということは、皇室の祖先神が君臣一体の昔の頃に帰ってしばらく世の中を治めさせようと、お考えになったために実現したものである）と述べて、自身の血統から出た三寅を必要以上に高く評価し、摂家將軍の誕生に大きな期待をかけたのである。

なお『愚管抄』は、この摂家將軍を擁立した北条政子についても、「女人入眼ノ日本国イヨイヨマコト也ケリ」（日本国は女性が最後のしあげをする国だというのは本当だ）と高く評価している。こうした女性に対する高い評価がなされる背景

には、慈円が生きた当時の社会では、実際に女性が政治や経済に大きな力をもっていたという事情があった。たとえば、内親王e【① 暲子 ② 妍子 ③ 得子 ④ 嬉子 ⑤ 時子】(1137~1211)は父母から伝領した膨大な荘園群を管理し、八条女院とよばれ、治承・寿永の内乱の政局にも大きな影響力を発揮している。

〔Ⅱ〕 以下の文章は、室町時代の社会・文化について記したものである。文章内におけるA～Eの【 】に入る最も適切な語句を①～⑤の中から選び、マークしなさい。また、 ～ の中に入る最も適切な語句を漢字で記しなさい。

室町幕府の体制が確立されるにともなって、將軍家を中心とする武家文化が形成された。その前提には、足利尊氏による京都での開幕以来、多数の地方武士が上洛して集住し、公家の伝統文化にかかわったことがあげられる。3代將軍の足利義満はA【① 1391 ② 1392 ③ 1397 ④ 1399 ⑤ 1401】年に京都の北山に壮麗な山荘を完成させた。そこに建てられた金閣の建築様式は伝統的な寝殿造風と禅宗寺院の禅宗様をあわせたものであり、この時代の文化は北山文化と称されている。

鎌倉時代に武家社会の上層に広まった臨済宗は、足利尊氏の帰依を受けて以来、幕府の保護を受けて繁栄した。義満は南宋の官寺の制にならい、臨済寺院の寺格である五山・十刹の制を整えた。五山・十刹の制では、南禅寺が五山の上におかれ、京都五山と鎌倉五山の諸寺があった。そして十刹は五山につぐ官寺をいい、さらに十刹の次位に を定めた。幕府は僧録において官寺を管理し、住職などを任命した。義満がB【① 夢窓疎石 ② 無学祖元 ③ 虎関師錬 ④ 蘭溪道隆 ⑤ 春屋妙葩】(1311～1388)を初代の僧録に任じたのにはじまる。五山の禅僧には中国からの渡来僧や中国帰りの留学僧が多く、禅だけでなく、禅の精神を具体化した水墨画や建築・庭園様式などを伝えていった。禅僧のあいだでは、漢詩文の創作などもさかんであり、義満のころ、五山詩文の「双壁」と称される (1336～1405)と、義堂周信は、中国文化の普及にも大きな役割を果たした。

また能も北山文化を代表する芸能であった。能は猿楽や田楽などを集大成し、発達していった。このころ寺社の保護を受けて、能は各地で興行されるようになった。なかでも興福寺を本所とした観世・宝生・ ・金剛の座は大和猿楽四座といわれる。そのうち観世座を率いた観阿弥・世阿弥の父子は、義満の保護を受け、芸術性の高い猿楽能を完成させた。

そして北山文化で開花した室町時代の文化は、その芸術性が生活文化のなかにとり込まれ、新しい独自の文化として根づいていった。足利義政は、応仁の乱後、京都の東山に山荘をつくり、銀閣を建てた。この時期の文化は、東山山荘に象徴されるところから東山文化と称される。この東山文化は、禅の精神にもとづく簡素さと、伝統文化の幽玄・侘を精神的な基調としていた。公家や武家などの上流階級においては書院造が用いられるようになった。書院造については、押板・柵・付書院などの施設と住宅を襖障子などで間仕切りして、畳をしき、天井をはり、明障子を利用するなどといった特徴が見出される。書院造の住宅や禅宗様の寺院においては、禅の精神で統一された庭園がつくられた。その代表的なものが、石組と白砂で禅の境地や自然を表す **え** であり、たとえば竜安寺の石庭が有名である。こうした新しい住宅様式の成立によって、座敷の装飾が盛んになり、掛軸・襖絵などの絵画、床の間をかざる生花・工芸品が発展した。

この時期の水墨画では雪舟が著名である。雪舟は相国寺の画僧で **お** (生没年不詳)の弟子であり、明から帰国後に諸国をめぐり、日本の自然を描き、水墨山水画を極めた。

大和絵では、応仁の乱後、土佐光信が土佐派の基盤を固めた。他方で、狩野正信・元信父子は、大和絵の色彩に水墨画の描線を統一して、狩野派をおこした。狩野正信は幕府御用絵師で、その代表作として、次ページのC【① 周茂叔愛蓮図 ② 秋冬山水図 ③ 大徳寺大仙院花鳥図 ④ 洛中洛外図 ⑤ 寒山拾得図】を描いている。図の作品は、宋代の文人の故事を基にしたもので漢画に日本的情趣を加味した作品である。



日本の伝統文化を代表する茶道、花道の基礎も、この時代につくられた。茶の湯では村田珠光が出て、茶と禅の精神の統一を主張し、侘茶を創り出した。のちに侘茶の方式は、堺のD【① 万里集九 ② 武野紹鷗 ③ 南村梅軒 ④ 古田織部 ⑤ 山上宗二】(1502~1555)が受け継ぎ、そして千利休によって完成された。他方で、生花も座敷の床の間をかざる立花様式が定まり、床の間をかざる花それ自体を鑑賞する形がつくられていった。立花の名手として京都六角堂頂法寺の池坊専慶が知られ、以後、池坊がこの分野を領導することになる。

一方、政治や経済の面で力を失った公家のなかには、伝統的な文化の担い手となって有職故実の学問や古典の研究を積極的に行ったものもいる。古典では古今和歌集がはやくから和歌の聖典として重んじられ、その解釈なども秘事・口伝のもとで神聖化され、特定の人だけに伝授された。こうした古今伝授は、「古今和歌集」の故実・解釈などの秘伝を弟子に伝えることであり、武士で二条流歌人もあったE【① 三条西実隆 ② 東常縁 ③ 細川藤孝 ④ 中院通勝 ⑤ 牡丹花肖柏】(1401~1494?)が1471年に宗祇に伝授したのが始まりであるとされる。それに加えて、「古今和歌集」や「伊勢物語」、「源氏物語」などの古典に対する関心は強く、書写・校合だけでなく、一条兼良らについて講釈を聴聞したり、同好者による研究会もしばしば行われた。また地方武士のなかには、上洛の際に古典の知識を習得するものも少なくなく、領国文化の発展の要因となったが、これは応仁の乱で公家が地方に下ったことでいっそう促進された。

〔Ⅲ〕 以下の文章は第一次世界大戦から第二次世界大戦までの日本の経済について記したものである。文章内における(a)~(e)の【 】に入る最も適切な語句を①~⑤から選び、マークし、また ~ の中に入る最も適切な語句を漢字で記しなさい。

第一次世界大戦は、日本に空前の好景気をもたらした。日英同盟を理由に日本も参戦したが、戦争の直接的な被害をほとんど受けることなく、戦争で手一杯の欧州列強を尻目に中国における権益の拡大をはかった。この時期、日本製品の輸出が拡大し、貿易は輸出超過となった。なかでも、世界的な船舶不足により、海運業および造船業が活況を呈し、(a)【① 内田信也 ② 鮎川義介 ③ 古河市兵衛 ④ 浅野総一郎 ⑤ 中野友礼】(1880~1971)のような、いわゆる船成金がたくさん生まれた。鉄鋼業においても、八幡製鉄所が拡張され、また満鉄の経営する の設立のように、民間の製鉄会社が設立された。さらに、ドイツからの薬品・染料・肥料などの輸入が途絶えたために、国産化が進み、日本において化学工業が勃興した。このように、第一次世界大戦は日本に重化学工業の発展をもたらしたといえる。

このころの好景気は、著しいインフレーションをともなった。農産物や生活必需品の価格は上昇し、大戦による軍事米の需要の増大や投機的な米の買い占めなどによって、特に米価の著しい上昇が生じた。1918年には、米の買い占めに反対する富山県の主婦たちの運動が契機となって、米騒動が発生した。世論の厳しい批判から、時の内閣総理大臣 (1852~1919)は同年9月に退陣した。

第一次世界大戦が終結すると、それまでの好景気から一転して、日本経済は恐慌へと向かっていった。1920年の株式市場の暴落を契機に、戦後恐慌が起き、1923年の関東大震災はそれに追い打ちをかけた。このとき、銀行手持ちの手形が大量に決済不能となった。こうした決済不能となった震災手形に対して、政府は日本銀行による特別融資で対応しようとしたが、それは一時しのぎの対応策に過ぎず、震災手形の処理はなかなか進まなかった。1927年、第一次若槻礼次郎内閣は、震災手形処理の法案を議会に諮ったが、その過程で、東京渡辺銀行の経営悪化に関する蔵相 (1859~1934)の失言をきっかけとして、取付け騒

ぎが起きた。このとき、台湾銀行や(b)【① 十五 ② 横浜正金 ③ 日本勧業
④ 農工 ⑤ 朝鮮】銀行(1877年設立)など32の銀行が休業に追い込まれた。こ
うして、金融恐慌は起きた。若槻内閣は台湾銀行救済のための緊急勅令を發布し
ようとしたが、(c)【① 衆議院 ② 陸軍 ③ 元老院 ④ 貴族院 ⑤ 枢密院】の
反対で拒否されたために総辞職した。そのあとの田中義一内閣は、蔵相
(4) (1854~1936)のもとで、モラトリアムを発し、日本銀行からの巨額の
非常貸し出しによって恐慌をしずめた。

金融恐慌は、日本の各産業における多くの企業の淘汰をもたらした。中小企業
だけでなく、大手企業の中にも倒産に追い込まれる企業もあった。当時、総合商
社として急成長を遂げた鈴木商店も金融恐慌の中で淘汰された企業の一つであ
る。鈴木商店はもともと砂糖取引商であったが、樟腦の商売で成功し、貿易だけ
でなく製鉄業などにも事業を拡大していた。戦後の不況によって、鈴木商店の経
営は悪化し、最終的に台湾銀行からの融資が打ち切られ、1927年に同社は倒産
した。鈴木商店の社員が倒産後に再編した商社が、(d)【① 江商 ② 日商 ③ 岩
井商店 ④ 日本綿花 ⑤ 東洋綿花】である。金融恐慌は、さまざまな企業の淘
汰をもたらす一方で、一部の企業への集中を促し、カルテル・トラスト・コン
ツェルンの形成などを促した。

1920年代の日本経済は、再三にわたる不況に苦しめられた。政府はそのつど
日本銀行券の増発によってその場をしのいだ。しかし、それは一時的な回避策に
過ぎず、インフレーションを招くこととなった。それに加えて、1917年以來の
金輸出禁止が続く中で、外国為替相場は動揺を重ねた。一方で、大戦後まもなく
欧米諸国は(e)【① アメリカ→ドイツ→イギリス→イタリア→フランス ② アメ
リカ→フランス→イギリス→イタリア→ドイツ ③ イギリス→ドイツ→アメ
リカ→フランス→イタリア ④ フランス→ドイツ→イギリス→イタリア→アメ
リカ ⑤ イギリス→アメリカ→イタリア→ドイツ→フランス】の順に金輸出解禁を
行なっていった。欧米諸国が金輸出解禁を行ってもなお日本は金輸出禁止を解
くことはなかった。そのような中、外国為替相場の安定化のために金輸出解禁を
望む声が大きくなり、1930年に浜口雄幸内閣は金輸出解禁を行なった。しか
し、1929年のニューヨーク株式市場での株価大暴落を引き金に発生した世界恐

慌によって、輸出が激減して、さらに金の流出が激しくなった。このため、日本経済は深刻な打撃を受けた。これがいわゆる昭和恐慌である。

1931年、犬養毅内閣は成立後ただちに金輸出再禁止を断行した。それによって、円の為替相場は大幅に下落し、企業は円安を利用して輸出を増大させた。また、1931年に、(5)が制定され、生産や価格の制限がなされ、カルテルの結成が促された。このような政府による産業の保護政策、そして軍需の増大によって、重化学工業がこの時期に著しく発達した。

一方、農村においては、恐慌による農産物価格の下落、生糸の輸出減、兼業の機会の減少によって、人々の生活は苦しく、欠食児童や娘身売りが続出した。こうした中、1932年、斎藤実内閣に対して農村救済請願運動が展開された。政府も公共土木事業を行なうなど、農民に仕事を与えたが、軍事費の膨張にともなって、この事業は縮小された。そこで、政府は農山漁村経済更生運動を進め、農村の窮乏を農村自身の力で救済するための自力更生と隣保共助を提唱した。

〔IV〕 以下の文章は食生活とその関連事項について記したものである。文章内における(A)~(E)の【 】に入る最も適切な語句を①~⑤から選び、マークし、また ~ の中に入る最も適切な語句を漢字で記しなさい。

日本列島に最初に住み始めた人々はかなりの長期にわたり、採取生活によってその日々の糧を得ていたと考えられている。いま、その一端は貝塚や集落遺構の発掘により明らかにされつつある。

縄文前期から晩期まで続いた宮城県東松島市の(A)【① 里浜 ② 加曾利 ③ 鳥浜 ④ 津雲 ⑤ 大森】貝塚群からは、縄文時代の人々が自然の恵みを四季にわたって享受していたことがわかる遺物が出土している。実りの秋には、トチ、クリ、ハシバミなどの堅果類、キノコ、ヤマユリ、ヤマノイモなどの根茎類、春にはフキノトウ、アサツキ、セリ、ゼンマイなどの山菜、そして海草、春から夏にかけてイワシ、初夏にはスガイ、アサリ、夏にはアジ、サバなどを採集・狩猟・漁労などで得ることができたと考えられている。この時代すでに各季節でとれたものを計画的に保存し、食糧獲得量の少ない冬や夏に消費されただろうことは、保存施設として貯蔵穴が各地で発見されていることから類推できる。また、食糧の計画的な供給方法として原始農耕の痕跡も報告されている。縄文時代前期中頃から中期末葉の青森市郊外の大集落遺跡である 遺跡から出土したクリをDNA鑑定したところ、それが栽培されていたものであることなどが判明している。そこからは、ほかにも多数の堅果類(クルミ、トチなど)の殻、さらには一年草のエゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどといった栽培植物も出土している。

必ずしも安定的ではなかった食生活に大きな変化をもたらしたのが、縄文時代の末期以降開始されたといわれている稲作であった。長野県塩尻市にある縄文中期から平安初期にわたる平出遺跡では米食文化ではなくてはならないカマド跡を持つ竪穴・平地住居跡が出土しており、米を中心とした地方庶民の生活を今に示している。古代では、(B)【① 炒めて魚介などのだしで炊いた ② 窯で炊いた粥状の ③ 油で炒めた ④ 甑こしきで蒸した ⑤ 瓶などに詰めて発酵させたこわい】強飯が主に食されていたといわれている。これを乾燥させた乾飯は携行食糧としてかなり

後年まで旅行の際などに多用されていたらしい。遣唐使などもこれを航海に持参したといわれている。

平安時代の初期には、中国の食文化の影響から、唐揚げや唐煮、唐菓子などの料理が食膳に上り、中国風の納豆なども食べられていたという。また鎌倉時代には、禅宗と共に喫茶の風習が広まった。禅寺では料理や食事も修行の一環とみなされるようになり精進料理が発達し、豆腐など現代の日本料理の基礎の一部が完成した。一説によれば鎌倉五山第一位の **イ** がその名の由来とされる料理も今に残っている。このような食生活の充実を支えたのが、この時代の商工業の発達であった。定期市が定着し、小売商人も活躍した。手工業や商人の座が発達し、それらは天皇や大寺社からそれぞれ供御人や神人の称号を与えられ、関銭の免除や広範囲な独占販売権を認められ、全国的な活動をみせた座もあった。これには各地の非農業民も結集し、それぞれ山海の供物を献上することで特権を得た。この結果、桑名の魚介類など地域の特産物が生まれ、山海の珍味が広く世間に知られるようになったのである。このように座に対して一定の権威を持って座衆の営業・通行などの特権を保証し、見返りに座役を徴収する公家や寺社を指して一般に **ウ** と呼ぶことが多い。

室町時代から江戸時代にかけては、経済・文化が大きく発展し、当時の献立や料理書から料理の内容が豊かであったことが知られている。鰹節や昆布でだしをとる技術が高度に発達し、砂糖の普及により、甘い和菓子が食べられるようになった。とくに経済、物流の拠点だった大坂では、瀬戸内の豊かな魚介類や近郊で作られた野菜だけでなく、全国の産物も集められた。そのため「天下の台所」と評されるほど食材に恵まれていた。とくに、加工した昆布を用いただしの文化が、船場を中心に発展した。この関西風のだしの決め手である松前の昆布を上方に輸送した主要な定期航路は(C)【① 高瀬船 ② 樽廻船 ③ 北前船 ④ 内海船 ⑤ 菱垣廻船】と呼ばれている。一方江戸では、濃口醤油を使用した独自の料理文化が開いていく。天ぷら、にぎり寿司や蕎麦などの屋台による料理が発達した。醤油生産は大量消費に歩調を合わせその規模を増大していくが、産地としては京都、銚子、竜野、湯浅、そしてキッコーマンやヤマサ醤油の発祥の地である下総国の **エ** などが著名である。もともと、貧農や庶民のあいだでは米食

はめったにないご馳走であり、麦や稗、粟などのいわゆる雑穀やこれに少量の米をまぜたようなものが日常的に食されていたといわれている。

明治になると、神仏分離、廃仏毀釈により肉食が解禁され、牛鍋などが食べられ始めた。また、陸海軍においては給食や携帯口糧として、従来の日本料理とともに西洋料理がレシピに取り入れられ、肉じゃが、カツレツ、カレーライスやパン食、乳製品が民間にも広まった。やがて大正時代にかけてこれらの肉を使った料理屋やフライなど日本人の好みに合わせた西洋料理屋、「洋食屋」などが外食産業として確立していくが、それらは庶民にとって日常を忘れることのできる年に数回の楽しみであった。

鍋はぐつぐつ煮える。牛肉の紅は男のすばしこい箸で反される。白くなった方が上になる。斜に薄く切られた、ざくと云う名の葱は、白い処が段々に黄いろくなって、褐色の汁の中へ沈む。箸のすばしこい男は、三十前後であろう。晴着らしい印半纏を着ている。傍に折靴が置いてある。酒を飲んで肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

(初出『心の花』14巻1号、1910年)

上の一文は明治時代を代表する小説家で、島根県津和野出身の オ (1862~1922) の短編、「牛鍋」の一部であるが、ここでの牛肉はやはり普段口にすることは少ない「大変なごちそう」としての代表的な食物として描かれている。

しかしながら、日露戦争期から第一次大戦期にかけての経済成長は確実に庶民の食生活に変化をもたらしていった。都市部のベッドタウンに集住していった中間層は、文化住宅など洋風を意識した住宅に住み、それに伴ない、茶の間が一家団欒、食事の場として使われるようになった。それまでの箱膳の作法から、ちゃぶ台を囲んだ食事が家族団欒の場として認識されるようになっていったのである。著書『家庭の新風味』(1904年)において「テーブルと云っても善い、シッポク台と云っても善い、兎に角従来の膳といふものを廃したいと吾輩は思ふ」とそれぞれの箱膳を前にする食事の作法を「家父長制的」として、それから脱却することを主張したのは、『平民新聞』で反戦論を唱え、枯川と号した社会主義者で

あるD【① 西川光二郎 ② 幸徳秋水 ③ 堺利彦 ④ 石川三四郎 ⑤ 河上清】
(1870～1933)であった。

ただし、日中戦争期から太平洋戦争期にかけて展開した国家総動員体制はこの
ような一家団欒の風景にも大きな影を落としていった。1939年には公定価格制
をしき、多くの物資に対する価格統制を強化し、食料品についても1940年には
米の供出制とともに消費者に対しては配給制がしかれることとなった。1942年
に公布された食糧管理法はもともと配給を一元化し、政府による供出価格と供出
数量の決定により安定的に国民に主食を送り届けるためのものだったが、戦後の
混乱期を経てかなりの期間実効力をともなった法律となっていた。やがて政府
米の買い上げ制度が破綻し、自主流通米以外のいわゆる「ヤミ米」問題や諸外国か
らの米市場開放問題が浮上すると、ウルグアイ＝ラウンドを経たE【① 1965
② 1975 ③ 1985 ④ 1995 ⑤ 2005】年にいたってようやく同法は廃止され、
同時に「新食糧法」が施行された。